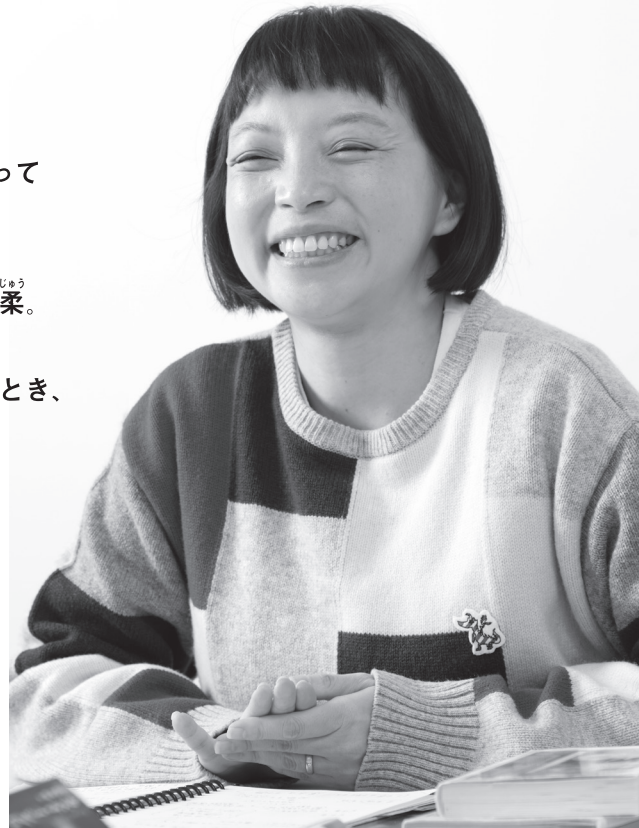


文学の ふるさとをたずねて

温 又柔 (作家)

聞き手=仲俣暁生 (文芸評論家)

日本人の両親を持ち、イギリスで育って
英語で執筆するカズオ・イシグロ。
そして台湾人の両親を持ち、
日本で育って日本語で執筆する温又柔。
両者の作品にふれ、文学が
どこから生まれてくるのかを考えたとき、
見えなかったものが見えてくる。



——温さんが最初に出会ったイシグロ作品は『遠い山なみの光』、しかも邦訳が旧題の『私たちの遠い夏』だったと、以前ある雑誌に寄稿されていた。温さん自身が二〇〇九年に『来福の家』で小説家としてデビューした直後、沖縄の書店でのことだったそうですね。当時、この作品をどのように読んでいたということからお話を伺えますか。

温 あらためて当時を振り返ってみると、私はイギリスの作家であるカズオ・イシグロという人の、日本との「距離」のとり方にまず驚いたんだと思います。ああ、母国をこういうふうに小説にしているんだ、と興奮したんです。「異郷」で育つ子どもとして、もともと宙吊り感覚みたいなものはあったのですが、『来福の家』を書いた小説家として認識されることで、日本の読者からも台湾の読者からも、「書くこと」を通してどちらに帰属したいのかを問われている気がしていました。「日本語で書いているのだから、日本人になりたいんでしょう?」「日本には絶対に帰属せず、台湾人として書き続けるのでしょうか?」——そのどちらかを選ばなくてはいけないように感じて、辟易としていた時期でした。

——どちらかのアイデンティティを選べ、という圧力が強かったんですね。

温 はい。そんなときだったので、『浮世の画

家』の原著の刊行が一九八六年、『日の名残り』がブッカー賞を受賞したのが一九八九年だったことにも不思議な符合を感じていました。というのも私自身が物心ついたのが、ちょうどこの時代だったからです。

台湾人の子どもとして育つ予定だった一人の人間が、日本で育って「日本人化」していく。その人生の初期にあたる時期と、日本から遠く離れた「カズオ君」が、イギリス人だからといって誰でも獲れるわけではない——そんなことは当たり前なんですけど(笑)——名高い文学賞を獲得した時期とが偶然に重なった。まったく個人的な感慨ですが、そんなカズオ・イシグロの作品と出会ったことに運命的なものを感じて、なんだか勇気が湧いたことを覚えています。

『私たちの遠い夏』を読んだあとに『浮世の画家』もすぐに読み、日本を舞台にしたこれらの作品にとっても惹かれました。『日の名残り』や『わたしを離さないで』を評価する声が多く聞かれましたが、私はこの二作がとくに好きでした。

「フェイクな日本」のリアリティ

——イシグロは日本生まれですが、幼少時に日本を出ているのでその記憶は完全なものではないと

思われます。彼の小説で描かれる日本は、ある意味、一種の「フェイク」ですね。たとえば『遠い山なみの光』でも、日本人というのは自殺するものだという描き方がされている。そのニュアンスは、イシグロの作品をずいぶん読んだあとだとわかるけれど、そこに躓く日本の読者もいたと思います。

温 私はそんなに引っかけません。じつは台湾の映画監督、エドワード・ヤンの『牯嶺街少年殺人事件』(一九九一)にも同じ表現が出てくるんです。日本統治時代の台湾に住んでいた日本人家族が、日本家屋の家を残したままいなくなり、戦後に中国大陸から移住してきた外省人の家族がその家を政府からあてがわれる。その家で子どもたちが遊んでいると、屋根裏から日本刀が見つかる。そして「その刀はきつと日本の女が自殺するために使っていたんだろう」とみたいなことを言うんです。

私は日本語字幕でこの映画を見たけれど、当時の日本人女性のイメージがこんなふうになりはじめられていることが面白かったし、その痕跡としての日本刀が、台湾映画でそのように表現されているのが興味深かった。でも多くの日本人は、そうした日本人のイメージが他のアジアの国や、それこそイギリスにまで尾を引いて残っていることに、気づかないままです。

——「フェイク」であるとしても、そこには一種の真実が籠もっている、と。

温 そう。私にはたぶん、その「フェイクの日本」が逆にすごく心地よかったです。もし自分が、日本生まれ日本育ちの日本人だったら、「日本はこんなじゃないよ」と言って拒絶していたかもしれない。でも作家として走り出した頃の私は、「日本らしさ」は日本人だけが保証できるものなのだろうか、といった問題で悩んでいました。そういう時期に、日本にルーツを持つイギリス人の作家が、日本をこんなふう書いてくれたことに、爽快感を覚えたんだと思います。

『浮世の画家』(ハヤカワepi文庫)の訳者、飛田茂雄さんの「訳者あとがき」を読んだときは、めまいがするほど、「ああ、これでいいんだ」と背中を押される思いがしました。自分の故郷やよく知っている風景を小説に書く際に、小津安二郎の映画のようなものまでも、自分の記憶の素材にしてしまっている。日本の作家だって、日本を描くときにそうしたことは皆やっているはずなのに、私みたいな立場の人間は、自分の生まれた国に対しても育ったホスト国に対しても本当のことを書けているのか、と品定めされているような感じがあります。でも、ひとたび表